

故阿部吉州師追善一般慰安琵琶公演

五月二十日(土)昼十一時半〜夕四時仙仙台駅前
日立フアミリーホール、主催東北琵琶連盟(理事
阿部万二氏)。われらのしあわせ〜阿部万二氏
乃木將軍〜小形錦州〜異国の丘〜阿部錦仙
鉢の木〜野本旭栄〜屋島の誓〜吉田江水〜山
科の別れ〜輝錦統〜政岡〜長谷淳水〜敦盛
都錦穂〜茨木〜菅野有水〜伊豆の御難〜輝錦
凌〜吹雪の敵〜倉林滝水〜荒城の月に題して
(来賓掛合) 東京輝錦統、輝錦凌、絃都錦穂。

東都旭会第五回演奏会

五月二十一日(日)正午東京板橋区民会館、主
催同会(会長藤巻旭鴻氏)(千円)。良寛さ
ん〜藤巻典子、加奈子。絃旭陽▽山吹の夢〜
藤巻旭恵。絃旭祐、旭憲▽衣川〜大西旭好。
絃旭鴻▽華道華の恵み〜藤巻旭彰、藤巻旭嗣。
絃旭川、旭英、旭呂、旭蓉。生花三人▽大楠
公〜大野旭翠、藤巻旭星。絃旭鴻▽対王丸〜
黒田旭映、古川旭神。絃旭陽、旭薫▽未練西
行〜内田旭章▽天の羽衣〜松元旭川、橋上旭
英、古川旭冷。絃旭鴻、旭彰、旭神。笛一▽
那須与市〜会主藤巻旭鴻▽舞扇鶴ヶ岡〜藤巻
旭祐、初谷旭憲。絃旭陽、旭史。笛一▽羅生
門〜板倉旭富。絃旭芳、旭洲▽噫無情〜旭史
外五人。絃旭鴻、琴、ヴァイオリン各一。演
出藤巻旭陽▽青の洞門〜吉島旭紅▽綱鎖〜石
田旭呂、柴田旭容。絃旭彰、旭章、小絃旭陽
▽唐人お吉〜宮田旭輝。絃旭鴻、笛一▽安宅
の関〜若宮旭登▽新琵琶楽①五木の子守唄②

黒田武士〜歌、琴、笛、小絃各一。絃十四人。

ものがたり琵琶演奏会

五月二十五日(日)昼一時東京上野本牧亭、主
催難後援会(会主杉山旗水氏)(千円)。
掛合五条橋〜橋本草水、旗水。絃穂苑▽掛合
羽衣〜藤原穂静、都穂鳳、大場穂苑、都穂穂
▽白虎隊〜座間焔水▽新撰組〜二反田岳水▽
堅田落〜若宮旭登▽曲垣平九郎〜木原綾子▽
琵琶弾法門琵琶、啄木の曲、流泉の曲〜鈴木
流泉▽掛合綱鎖〜高田栄水、旗水。絃綾子▽
須磨の敦盛〜都錦穂▽吟詠棄児行〜若水桜松
▽舟弁慶〜中谷襄水▽物語琵琶宮本武蔵〜会
主杉山旗水。絃穂穂▽坂崎出羽守〜浅野晴風。

ラヂオ琵琶放送

五月十一日(日)昼三時十分NHK・FM。祇
王〜半田綾子▽井伊大老〜都錦穂両女史放送。

転居

桑折道夫氏 福島県郡山市大槻町字北田十
番地の二住宅三番棟に転居(電話〇二四九一
五一〜五二七番 干)
浅見汀水氏 大阪市旭区新森二丁目一三の
一〇に転居(電話〇六一九五一一〜一六五番
干535)

予告

〇各流派琵琶合同演奏大会 六月四日(日)正
午、京都市東大路松原下ル(市電東山線清
水坂下車)主催京都琵琶協会。会員十七人
の外大阪の名手二人ゲスト出演。
〇京都琵琶協会六月例会 六月十七日(日)昼

一時、会員矢吹旭美津女史宅。
〇日本琵琶協会関西支部役員会 六月十
八日(日)午後二時阪急電車夙川駅前楊柳水委
員宅。
〇東西合同一泊弾交会 七月三十、三十一
日浜松市入野町西遠荘。四明会、正絃会、
鶴絃会共催。(会費三食付四千五百円)。

とあ

花が咲き花が散り、目にしみるよ
うな濃い青葉の新緑を満喫してい
るうちに暑さが加わり、やがて鬱陶し
い梅雨期が来て琵琶楽器の湿りを防
ぐの一苦勞する、そして今年も半分が終
る季節のよいもホンの僅かな間で暑いにつ
け寒いにつけ人生に苦勞は絶えぬものとみえ
る。先日亡くなられた人間国宝指定の狂言師
野村万蔵氏は「師匠のまねだけしているよう
ではその芸は死ぬ」と云われた。蓋し名言で
ある。青は藍より出でて尚青し。筆者の尊
敬する某大先輩は過去数十年の間に数知れぬ
ほど演奏会などに出演したが未だ嘗て満足
な演奏は一回も出来なかつたと云われたこと
がある。平常は稽古もロクにせず演奏会
の前になると思い出したように琵琶を叩くよう
なことでは充分な力を発揮できないのは当然
である。三味線三年琵琶八年〜芸の道はどこ
までいっても果てしなく、むつかしい。

昭和五十三年六月一日発行(非売品)
編集者 植村 稟 水
発行所 京 絃 社
〒569 高槻市津之江北町一ノ二二三
電話〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶
機関紙

京

絃

第二八八号 京 絃 社

戦国時代の女性



主家の義仲と生死を共にした今井兼平の妹である。

本紙四月号と五月号で「薄幸の佳人常盤御前」について、見かたを異にする一文筆家と一作家の文章の一節を引用して、その是非の判断を諸氏に訴えたところ、最近に例を見ないほど大きな反響を巻き起こし、各方面からいろいろ感想を寄せられたが、本号では常盤御前とは全く対照的な女性「巴御前」を紹介して参考に供したい。

「巴御前か板額(はながく)か」という言葉は、大力無双の女武者を云うときに使われるが、その巴も常盤と同じく源平争乱期の女性で、木曾義仲の愛妾として主君と生死を共にせんとしたが、遂に義仲と死別の悲運に逢う女人である。しかしその生き方は、境遇も勿論ちがうけれども、常盤の場合とは正反対で、立派に女性としての最後を全うしたと思われる。

巴御前は、信濃の国の豪族中原兼遠の娘で、

義仲は源為義の子の義賢の次子で、義賢は義朝の異腹の弟であるから、頼朝や義経らと義仲は従兄弟(いとこ)同志にあたる。義賢は一一五五年(久寿二)に兄義朝の長男で、悪源太義平に殺された。悪源太というのは、剛勇を源家の嫡男という意味である。その時義仲は数え年二才の幼児であった。信濃の豪族中原兼遠に育てられたので、巴とは幼ななじみであった。自然、長ずるに従い巴が御主でもある源家の御曹子義仲を恋慕うことになったのも、当然の成りゆきであつたらう。

彼女は武術にすぐれていた。「平家物語」では、巴のことを「いろいろ髪ながく、容顔まことにすぐれたり」と書き、滅多にない強弓をひく一人当千のつわものなりとも書いている。

義仲は京都に入るとき、信濃から巴の外

に山吹という二人の美女をつれていった。義経に追われて都から落ちのびるとき、山吹は病気のため都に残っていたが、巴はいつも義仲の側を離れずに従っていて、義仲最期の宇治の戦にも参加し、自ざましい働きをして武勲をたてている。

宇治、瀬田の護りを義経軍に打ち破られた義仲は、信頼していた後白河法皇にも見捨てられて、信濃を出るときは五万余騎であつた部下も、敗戦のため散り散りに失い、遂に主従ただの五騎となつてしまった。しかもその中に巴はしっかりと主を守って側に付き添っていた。「お前は女だからもういい、どこへでも落ちて行つて呉れ、わしは討死しよう。後世、木曾殿は最期のときに女を連れていた」と云われては武士の面目がたれたらう。

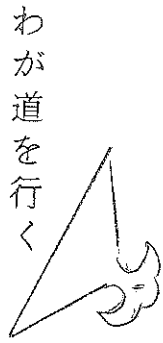
どこまでも生死をともにと心に誓っていた巴は、義仲にそう云われて遂にそれに従う決心をした。折りから寄せて来た敵の大將、御田の八郎師重という武蔵の国にきこえた大力の武者に駒をおし並べ、むづと取って引き落とし、自分の馬の鞍の前輪に押しつけて少しも動かせず、首を捻じ切つて捨て、そのあと物具(ものぐ)を脱ぎ、名残り惜しくも東国指して落ちて行つた、と「平家物語」は書いている。物語だから多少の誇張はあると思われるが、巴が大力の、武勇に勝れた美しい女性であり、心は優しく純真で、敗軍の御主、夫の身の上をひたすら思い、精いっぱい働

義仲の死後、巴は髪をおろし尼となつて信濃に隠棲し、後には越後の国友松に移り住んで、夫義仲や兄兼平、その他一族、部下たちの冥福を願ひに暮らしている。

巴も常盤と同じく、この乱世に女と生まれて、まったく稀な男まさりの才能、体力に恵まれ、ひたすら愛する人のために生きた。持つて生まれた境遇と、才能、体力が彼女の生涯を決定したとも云える。

肉体の美しさ以外に能力を持たなかった常盤は、最後までその美貌を生きた力としたが、移ろいゆく肉体の美しさを生命とした常盤の生き方は、精神の美にも生きた巴と比べて無惨であった。しかし世の常の女、平凡な女性の生きる姿は、彼女に似通ったものであり、それゆえに常盤の方に一層の哀れをそそるのである。

(此項終り)



わが道を行く

六十五年(五八)

西郷 天風

さて、此処で又、話を全国放送琵琶コンクールに戻せば、さすがが宗家の師範代で知られた大坪旭邦師演奏の「大物の浦」の、美事な出来栄に感激した神力鉄風師は、かかる名曲を催か十二分足らずの制限時間内に於ける

演奏では満足できず、せめて充分ゆとりある時間内で、心ゆくままの演奏を欲賞したい、と、市ヶ谷の自宅で一夕、琵琶を弾きむつどいを催したが、幽絳限りなき琵琶楽に魅せられてか、更に有楽町の蚕糸会館に於て、コンクール入賞琵琶大会を催し、この種の会にはかつて見られなかった上層階級の人々を招待した手腕は、さすが神力氏の人柄をしのぶに充分だった。

出演者は、関東地区即ち東京から選出された五名で、旭邦、天風の二名を中心に、薩摩正派の大先輩平豊彦先生の高弟木原平治氏、筑前琵琶宗家橘流の名手原田旭柳師、それに錦心流では宇都宮の医師森盛蔵師が、水号の許しなき理由で棄権し、代りに足立光師の高弟で、東京小石川維司谷の住人ながら、郷里北海道から参加した水越芦操女史を加え、仲々の格調豊かな、稀にみる演奏会だった。

因に、私と神力鉄風氏との出会い、その数年前水戸市近郊静村在、静神社境内にある斎藤監物(かの桜田門事変に於ける水戸浪士の一人)の墓参の件で、度々常磐松の頭山翁邸訪問の折、たまたま同席したのが初めて、この雙眼のいかめしい人物に、何か魅かるる感がある程度だったが、やがて病弱の体をつれて水戸の海岸に移住の際、この神力氏から茨城県内務部長宛の紹介状を得たことが、かの大日本琵琶国風会誕生の基と成ったのであった。

間は、国の内外を問わず人心の動揺甚だしき折とて、我々琵琶人にとっては働き甲斐のある時代で、今に残る思い出も数々あるその中から、順を追って幾何かを拾ってみれば、私が帰郷する二、三年前の事だったろう。この水戸は、旧幕時代から「大日本史編纂」によって、我が国体の本質を明らかにし、黄門光圀の慢遊記などによって、人の世の道を巷間に正す等はよく世人の知る処。即ち我を国文教の府として自他ともに許す所以であり、荒木大将が文部大臣として入閣するにあたり、この水戸の常磐神社に就任報告の義を行われたのも故なきにあらざった。

駄が谷の東方義会道場? (ここは新たに文部政務次官就任の茨城県選出石井三郎代議士関係の武術道場)に於ける新年宴会に招待を受け、閣下と対座の席に案内された。

左右に居並ぶ賓客は何れも閣下同様の顯官名士揃いで、私輩の席としては窮屈に堪えぬ次第ながら、詩吟の盛衰など時代向きの話題を含めての質問には恐縮の外なかつた。

やがて宴酣の頃、ステージに擬した演壇に、丈なす頭髪を後頭部に束ねて腰のあたりまで下げ、紋付袴の風手凛々しく立ちながら、おもむろに語り出す講談は、当時ブームを呼ぶ爆弾一勇士の、聞くだに悲壯極まる物語の熱演に、満場ひっそりと静まりかえって、終演も氣付かぬ程に見られた。

筑前琵琶歌

未練西行を偲んで

辻 旭城



「未練西行」の琵琶作詞古賀敬吾氏、三世旭翁先生作曲「花の大和路鐘に暮れ、月の紀伊路は露に明く、一鉢三衣の旅まくら、修業いそむ西行が、暇のうちは兎もすれば、悩みの影ぞ浮かぶなる、都にも同じ今宵の月を見て、涙にくもる人やありなむ……。」

愛したとみえ、西行さくらの名で呼ばれているのが所々方々にあるようである。謡曲には「西行さくら」という曲がある。これには桜の情が現れて歌問答をするという一節があるが、内容は西行が西山に山居のとき、花見に人の集まるのを心憂く思い、なんとか出足をとめようと「花見んと群れつづ人の来るのみぞ、あたら桜の科にはありける」と詠んだところ、その日の暮れ方に白髪の老翁が現れて「罪とがはいかがあらしの山桜、とがむる人のわがみやま木を」と返した。この白髪の翁というのは桜の精であったという。こうしたことから、何となくこの物語から、「西山桜」がゆかしく思われる。

煙草に火をつけながら、勝持寺の前の広場あたりに出ると、遠くからでもそれと知られる枝垂桜の美事に花をつけたのが、今を盛りと咲き誇ったその風情、まことに西山の春はこの一名木が占めているものと思われたが、さてこれが果たして西行桜なのか、尋ねる人もないままに、夕陽の中を心を残して帰ってきたのであるが、その後、西行桜は京の東山の双林寺のほとりにあり、この附近西行の住んだ庵室で、その庭に「西行桜」と呼ばれている桜の大きな木があるというのを友人から聞いて、日をあらためて訪ねた。

ここは真葛ヶ原の地続きで、うっかりするとそのまま通り過ぎてしまふそうなので、かたばかりの枝折門、低い建仁寺垣、西行庵と彫った石ぶみいかに世捨人の住居らしい苔むした草庵である。

あまり広くない境内の片隅みに休みのお茶屋、その前に「西行桜」と記した建札に沿って、四尺あまりの高さの若木らしいのが植わっている。

茶屋の老婆に西行桜は? と聞くと、「それがなあ、惜しいことに枯れてしまつたんだ。以前にこのお堂の前に大きい桜の木があつたんだすけど、もうよっぽど前から花が開かんようになりましてなあ、何と云うても古い木どしたさかい、とうとう枯れてしまひました……。」と云う。本当に惜しいことである。

「西行物語」を読んでみると、なだらか

な山々に囲まれ、清い流れにうるおされた古都は、平安朝から江戸時代末期までおよそ一千百年の間京は都で、同事に政事、文化の中心であった。東山三十六峰は、そのふとこに数々の大伽藍を抱き、日本の歴史が今も尚息づいている。京都を訪れる人が最初に足を向けるのも、東山の名所である。

西行法師はこの東山のあたり、双林寺のかたわらに庵を結び、お堂のみぎり(のきの石だたみ)に桜を組入れたもので、この花盛り(釈迦涅槃の二月十五日朝まだき、大往生をうけた)。

願わくは花の下にて春死なむ、その如月の望月のころ。建久九年の往生である。双林寺のかたわらとあるから、ここが西行の庵の跡であったのであろう。

果たして西行終焉の地かどうかは兎も角、せめて東山の名所として山桜でもよい、枝垂桜ならば尚佳い、幹のまわり一抱えもある桜を、この草庵の庭に是非植えておきたいものである。



錦心流琵琶 秋声会 前田 秋 声

琵琶の起源については、古代エジプトに始

まり、印度から中央アジア・中国を経て我が国に伝わったという説と、印度に始まって、一はアラビア・ペルシア(イランの旧称)を経てエジプトに伝わり、一つは中央アジアを経て中国・日本へと伝わったとする説など種々に説かれていて、結局のところつまびらかではない。いずれにしても琵琶本来は外来のものであって、海外から我が国にもたらされたものであることだけは確かである。初めて琵琶が我が国に伝わったのは、今から約千四百年前、欽明天皇の御代、仏教の伝来と前後しての時期とされている。

琵琶の種類には、雅楽琵琶、平家琵琶、荒神琵琶、薩摩盲僧琵琶、薩摩琵琶、(正派・錦心流・錦)筑前琵琶、四絃、五絃(旭会・橋会)がある。

薩摩琵琶が東京に紹介されたのは、明治十年頃吉水経和師、(初代錦翁)その高弟の肥後錦獅に学び、後に錦心流琵琶宗家となり、明治、大正、昭和にかけて、錦心の石重丸か石重丸の錦心かと、一世を風靡したのが我が恩師永田錦心先生である。先生は昭和二年十月三十日逝去した。

今回東宝五月特別公演の「赤ひげ診療譚」に、森繁久彌さんが自作の詞で琵琶をうたい、山田五十鈴さんが薩摩琵琶を弾くためにその指導を受けました。山田五十鈴さんは四月帝劇にて公演中の舞台その他多忙の処、寸暇に三十分間ずつ琵琶の弾く稽古を続けられ、



唐詩 王昭君 李白

昭君 孤二玉 鞍一
上馬 啼二紅 煩一
今朝 胡地 妾
昭君玉鞍を私ふ
馬に上つて紅顏啼く
今日漢宮の人
明朝は胡地の妾

この詩は王昭君が旅立つとき、馬に上つても、美しい顔を涙にぬらして泣いているが、今日は漢宮の女である身の、明日は胡地の妾となる不幸な身の上で、誠に気の毒なことであり、深い同情を表わした作である。物語は胡地との和親の為に生まれた悲劇で、辺塞詩ともいべきもので、言は簡単で意は

多く余情に託した表現である。

元帝は宮女の画像を見て召して寵愛したが、王昭君は画工に賄賂(わいろ)を贈らなかつたために、その画は美しくなかつたので天子に知られなかつた。単于(ぜんり)に嫁する時に天子は召して之を見るに、後宮第一の美人で天子は悔いたが、外国との信を破るわけにはゆかないので変更できなかつた。

池上作三氏(昭和三十年作)「王昭君」の一節。
駒をば下り昭君が、戎服(じゅうふく)なして琵琶を提げ、枯れし広野に佇めば、萌葱(もえぎ)の空の果てしなく、身にしむものは秋の風、しぐれて重き袖の露……

(情景が目につかんで来ます。)



(鴨水)

大阪夏の陣(二)

山川 流水

元和元年五月六日、小松山の争奪戦で大阪方の後藤又兵衛は、部下を指揮して奮戦したが、後続の菅の薄田隼人や真田幸村、毛利勝永らの友軍部隊はどうしたのか姿を見せない。

敵の大和口方面軍は一番手の水野勝成三千二百人、二番手の本多忠政五千、三番手松平忠明四千、それに四番手の伊達政宗一万人という圧倒的優勢である。

「日本戦史・大阪役」によると、後藤又兵衛は初め東軍を銃撃して撃退すること数回、敵七、八十人を殺したが、三方から攻撃を受けるに及んで勝敗は時間の問題と覚悟をきめ「死ぬのがいやなヤツは逃げろ」というと、全員戦死を誓う。又兵衛は部下をまとめて小松山を西に下り、石川との間の平地に展開し、二手にわけて東軍に突撃して又々敵を粉砕する。しかし優勢な敵は後から後から新手を繰出す。側面攻撃を受けて隊はバラバラに乱れる。伊達の本隊数千人も来て一勢銃撃、又兵衛も胸を撃たれて重傷を受けた。当番兵が肩に担ごうとするが、又兵衛は「首をはねて埋める」と後退を承知せず切腹、やむなくその首を斬ってその場に埋めた。正午に近い頃である。

いま大阪府柏原市片山町勝松山西約三百米の地点に「後藤又兵衛基次奮戦之地」の大きな碑が建ち、また玉手山遊園地の頂上に同顕彰碑がある。その碑文には又兵衛の略歴を記し「道義を貫いた又兵衛こそ日本民族の讃うべき信念の人物なり、然もこの蓋世の人物に未だ碑なし、よってここに顕彰碑を建立し、永年に人情を喚起し道義の龜鑑を示すものなり」との趣旨が記してある。

その日の正午ごろ大阪方の薄田隼人、明石

掃部らの部隊がようやく石川の西岸、道明寺河原に到着したが、先陣の後藤又兵衛は既に戦死し、その部下も殆ど全滅したあとで、来る菅の真田幸村ら本隊は未だ来ない、しかしこれを持ってはいられない。

「日本戦史・大阪役」は、後藤隊の残兵も交えて大阪方は追撃して来る敵に対抗、勇戦奮闘した。殊に薄田隼人は必死になつて縦横無尽、大刀を振るって馳け廻り敵七、八騎を切った。そこへ東軍水野日向守勝成の家臣河村新八郎が槍で応戦、激闘の末組打ちとなつた。隼人の従兵が主人の助太刀で新八郎の鎧に斬りつけたが刀がたたない。隼人は僅かに新八郎を傷つけたが、結局は隼人が殺された。大阪方の他の隊長たちは道明寺前まで後退し戦ったが、関東軍に押されて菅田八幡宮の森に立て籠った。

大阪羽曳野市菅田七丁目「薄田隼人正兼相碑」があるが、「大阪府史跡名勝天然記念物第一冊」によると、薄田の墓と称するものはこの附近に数ヶ所あり、自然石の碑も三ヶ所あるが、どれも俗説口碑に残るだけで証拠はない。ただ菅田七丁目にある碑は、兼相の子孫と称する旧陸軍中将薄田兼郎氏が探索研究の結果、明治十八年に建立したもので、今日では最も信じられる戦死の地の碑であるといふ。

「大日本史料」によると、薄田隼人は冬合戦のとき、守備を怠けて料理店に泊まり、酔って女と遊んでいる間に防衛陣地を乗っ取ら

れて、城内の笑いにさされたのに奮起し、夏の陣では討ち死にを決意していた。道明寺に着くと、隼人は後藤又兵衛に逢い、槍持ち一人だけを連れて先行し、再び帰っては来なかつた。水野勝成の家臣河村新八郎と槍で渡り合つて組伏せたとこを、水野方の中川嶋之介が横合いから隼人を打ち取つた、となつてゐる。

錦心流琵琶 石童丸



西條八十原作を改補

演奏時間十五分

母を麓にただ一人 高野の山に登りゆく
石童丸はすげの笠
九百九十の寺々を 訪ねつくせど出て逢わぬ
わが父上の慕わしや
ほろほろと鳴く山鳥の声聞けば
父かとぞ思う 母かとぞ思う
麓の母を案じつつ 三日月は夜は早や過ぎて
峰谷々をさまよふ 無明の橋にかかるとき

左に花桶右手に数珠 光明真言となえつつ
如萱道心下り坂
あな御僧よこの山に 今道心がましまさば
教えてくたへ請う様の 哀れに見ゆる幼な児の
顔つくづくと打眺め いくの者ぞと尋ねれば
国は筑紫の松浦漏 加藤左衛門重氏が
忘れ形見の石童と 開くより如萱胸せまり
返す言葉もあら泣きて 噎懐かしのわが子よと
云うて抱き寄せ名乗らんと思ふとわれば捨門の身
その道心はこそ秋 空しくなりぬと慰めつ
墓場に連行し指をさし これぞ父の墓なれと
教え給えば石童は 力泣く泣く腕まづき
涙に濡れし手を合わせ 南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏と伏し拝む姿を見つる如萱は
胸も張りさくばかりなり
十年にあまる修業にて 生者必滅会者定離
本来空の理りを 悟りながらも恩愛の
情にはもろきものなるか
墓場に倒れし石童を 抱き起こして徐ろに
涙は仏の為ならず ひとたび下り母上に
この事うて回向せよと 諭されければ石童は
泣く泣く里にきてみれば 母は石童を待ち兼ねて
麓の野辺に枯れ残る 草場の露とぞ消え給へ
あな父上に生き別れ 又母上には死に別れ
天にも地にも只一人 頼りとするは姉ばかり
逢うてこの由語らんと 帰りにみれば姉もまた
この世を去りて影もなし さてもつれなき浮世かを
心の奥の悲しみを 吹くは高野の秋の風

日本琵琶楽協会 関西支部総会

四月三十日(日)昼二時京都の山陰線嵯峨駅に集合、総会の前にはうらかな春の陽光を全身に浴びながら洛西嵯峨野に点在する琵琶楽に關係の深い釈迦堂、小楠公首塚、藤原定家(小倉百人一首選者)の家跡、新田義貞墓、往生院(妓王、妓女、母刀自、仏御前の墓)、滝口寺、二尊院、落柿舎、天竜寺、小督の墓などを巡遊してその当時に思いを走せながら会場の料亭錦心園に到着、総会に移り①三月十一、二両日開催の第一回名流演奏会収支決算報告、②年度収支決算報告をそれぞれ承認、③第二回名流演奏会を明五十四年五月六日(日)大阪灘波高島屋ホールに於て開催(会場交渉中)、④会員の懇親旅行開催(不日役員会にて詳細決定)、⑤その他。以上協議の後懇親宴に移り各自胸襟を開いて歓談、七時なごやかに散会した。

(出席者)順不同、敬称略) 山崎旭萃、平井春嶺、三浦蓮水、柴田旭堂、内田欽水、梅原旭濤、小川吟水、同夫人、大野皎月、川上琵琶、木庭旭山、木下皇水、楠田旭波、島田旭千、高千穂旭楓、富樫旭桂、中島旭穂、馬場鴨水、久徳旭蘭、平井夫人、牧南水、樹本旭風、矢吹旭美津、横野旭風、楊嶽水。

柏会・旭登会合同四月份例会

日本芸術琵琶柏会・筑前琵琶旭登会合同例

会が四月十六日(日)昼一時から東京西新宿の柏ビル六階で開催され門琵琶・伴流謡切弾法と本能寺・山崎錦幽二〇三高地・長岡旭鈴▼俊寛(上)▼坂入俊風▼堅田落▼平田旭舟▼鉢の木▼青木早水▼羅生門▼杉山旗水▼須磨の敦盛▼若宮旭登▼滝口入道▼錦幽▼小栗栖▼高田栄水。以上研修演奏の後小宴七時散会した。

赤心流春の大会

家元赤心流鶴翁氏主宰の第十六回春の大会が五月三日(祭)朝十時から静岡市城内の県婦人会館で開催され詩吟詩舞數十番の独吟合吟を披露し盛況を呈した。尺八伴奏は堀井小二郎氏。尚赤心流では毎年春は詩吟、秋は琵琶の演奏会を開催されることになっている。

三会員研修演奏のあと、①秋の演奏会を十月二十九日(日)京都商工会議所ホールにて開催、②新装の向日市老人福祉センターに敬老演奏会開催、③六月四日開催の春の演奏会の準備会を五月二十一日(日)昼本部にて開催、その他の協議をし、梅原女史斡旋による当地名産葡萄酒で一盃を傾け八時半散会した。

洲楓会琵琶演奏会

五月十二日(日)夕五時半東京上野本牧亭、主催洲楓会本部(会長大館美江子女史)一の組出演(千円)。月下の陣▼内田洲蓉▼白虎隊▼彼ノ矢洲友▼黎明▼中村洲心▼広瀬中佐▼真泉洲佳▼景清▼若林洲川▼武蔵野▼加藤洲晃▼奇縁▼弘沢雨▼西郷隆盛▼松崎洲陵▼鉢の木▼来賓遠藤鶴東▼都落ち▼同押川旭葉▼乃木將軍▼桑名洲聖▼羅生門▼稲垣洲玲。

筑前琵琶嶺派春の演奏会

五月十四日(日)昼博多駅前大博多ビル十二階ホール、主催博多旭蝶会(会長嶺旭蝶女史)(八百円)。六才から十四才までの男女児が独奏、合奏で白魚の詩▼博多人形▼五条橋▼壇の浦▼秋風故郷の山を披露してやんやの拍手を浴びたあと菅原道実▼旭蝶外八人▼楽琵琶演奏▼黒田節合奏▼湖水渡り▼内田旭潮▼稚葉の月▼青山旭子。尺八付▼黄金の日▼旭蝶、旭子▼フィナーレさくら吹雪▼旭蝶外九人・琴、十七絃、鼓、立方各一人。

洛南醍醐寺のさくら祭りに琵琶

豊太郎ゆかりの「醍醐の花見」を偲ぶ首記が四月十六日(日)昼同寺で催され大阪琵琶同好会の協賛で石童丸▼米原、島津▼西郷隆盛▼養老駿水▼衣川▼水谷旭甫▼五条橋▼寺尾旭吉▼関ヶ原▼光旭仙▼秋風故郷の山▼小中、村松、内海▼花の白虎隊▼馬野▼那須与市、若木敦盛▼鈴木鶴錦、別所鶴美、青柳鶴子▼大徳寺▼作花旭友▼井伊大老▼辻旭城▼姫ゆりの塔▼石橋旭嶺▼黒田武士▼田中歌水▼小栗栖▼中山鳳水▼新曲岸壁の母▼天津八千代。以上琵琶演奏の外詩吟、剣扇舞、民謡、万才、奇術等があり参詣者を喜ばせた。

明治神宮春の大祭に琵琶奉奏

四月二十九日から五月三日に亘り首記奉祝行事として琵琶、邦楽邦舞、雅楽能楽、三曲等の奉納演奏が企画され琵琶は三十日(日)昼十一時半普門史城氏が「城山」の一曲を奉納された。明治天皇は特に薩摩琵琶がお好きで御自分でも口ずさまれたと伝えられ普門氏の演奏は明治帝も囁き喜こびになつたと思われる。

京都琵琶協会五月份例会

五月七日(日)昼一時会員梅原旭濤女史宅。伊吹正陽、同夫人、馬場鴨水、戸田旭公、野田彰水、矢吹旭美津、山岡旭清、安住旭康、牧南水、桜井旭富、平井春嶺、同夫人、梅原、旭濤会員国友旭香、植村真水諸氏出席。二、